

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	「里親養育」における宗教の社会参加 一天理教を事例として一
Title(English)	
著者(和文)	青木繁
Author(English)	Shigeru Aoki
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京科学大学, 報告番号:甲第391号, 授与年月日:2025年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:弓山 達也,川名 晋史,KIYAMA LORINDA ROBER,中島 岳志,畑 中 健二
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Institute of Science Tokyo, Report number:甲第391号, Conferred date:2025/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	青木繁	
論文審査 審査員		氏名	職名	氏名	職名
	主査	弓山達也	教授	畑中健二	助教
	審査員	川名 晋史	教授		
		木山ロリンダ	教授		
中島岳志		教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は日本の里親の約 10%が天理教信者である点に注目し、宗教者の社会参加という視点から、天理教信者が福祉・社会活動に参加する動機と宗教者の社会参加における課題を明らかにすることを目的とする。そのため本論文は(1)天理教が社会福祉活動として実践してきた里親制度の歴史に関する文献調査、(2)天理教里親へのアンケート調査、(3)天理教里親への2種類のインタビュー調査、(4)天理教福祉施設の活動に関する調査、(5)地域の支部教会の社会参加に関する調査を実施している。

まず、天理教の里親養育の歴史的展開の文献調査(1章)では、天理教里親が特徴ある子ども観や救済観を有し、里親養育の動機は「ひのきしん」という天理教独自の宗教的利他行動と関わりがあること、国の里親政策の変化は里親を増やしていることが明らかにされた。戦後、里親養育は国の責任として福祉制度の中に位置付けられ、施設中心で養育が行われてきたが、近年、子どもの権利と言う趣旨から家庭養育中心に変更され、里親の数の増加と関連している。その中で天理教の社会福祉活動は100年前に児童養護施設を開設して以来の歴史があり福祉活動の実績を積み重ね、現在の里親養育の動向と結びついていたという。

次に、天理教里親の概要調査(2章)では、天理教里親連盟全会員にアンケート調査が行われ、里親の概要と動機、家庭環境、里子の概要など全体像が解明されている。ここでは子どもは選ばずに養育している里親が多く、大家族であること、また、天理教には「おたすけ」と呼ばれる社会的弱者を教会内に受け入れて一緒に暮らす伝統的な救済観があり、天理教の里親は一般的に里親が受け入れを躊躇しがちな虐待経験や障がいのある子どもも選ばずに受け入れることが、大きな特徴となっていることが指摘されている。

続く里父・里母へのインタビュー調査(3章)では、里親をはじめた動機、課題、里親の宗教的な信条、里子との関わり方などに関する面接調査が行われている。ここでは、里親は18歳までの養育期間が過ぎても継続的に里親と里子の関係が続けることを希望し実践してきたことが明らかにされている。里子の養護期間は限られるが、里親と里子の関係は永遠であると考えていること、宗教的行事への参加は、年長者の場合、学校や養育期間の都合で難しいことが多いと指摘されている。

そして自分史の分析から行った調査(4章)では、特徴ある社会的養育で育った、A支部教会長の語り分析対象になっている。A支部教会長は過去に児童養護施設で自身が養育を受け、その後は天理教里親の家で養育された。自立後、困難に直面し天理教に入信し、その後、里親の支部教会長を継承し、現在は3人の里親であるという。A支部教会長の語りから、児童養護施設での課題、自立の困難さ、里親養

育を決意する動機などが明にされ、これまでの2・3章での知見を補っている。

さらに本論文では、天理教福祉施設の活動に関する調査(5章)と地域の支部教会の社会参加に関する調査(6章)が実施されている。天理教福祉施設については天理養徳院と調布学園を対象に、宗教法人から社会福祉法人化で、活動にはどんな変化が起きたかが明らかにされている。いずれも職員が天理教信仰者以外から採用されるようになり、調布学園では職員信者率10%で、両施設とも宗教行事は自由参加となったという。天理教の児童養護施設は公的施設化していく中で徐々に宗教色を薄めていると指摘されている。6章では、あわせて地域の支部教会の社会参加に焦点が当てられ、社会参加の種類、地域との連携、公的機関との関係性、教団の支援などが調査されている。ここでは、支部教会が地域での実践活動からの要請を受け、教団が活動を支援している形態が指摘され、天理教福祉施設の活動と合わせて、天理教の地域福祉活動の裾野の広がりがうかがえる内容になっている。

以上を要するに、本論文は、宗教的動機から行う里親養育の実態を、制度レベル、教義レベル、教団本部—支部教会—末端信者レベルなど多角的にアプローチし、天理教里親の増える背景に、児童虐待の増加、震災以降の宗教者の社会的参加の増加、少子・高齢化社会、子どもの権利養護、里親政策の変遷など、社会の課題があることを解明する一方、国の児童の権利養護からの政策との乖離をも指摘し、宗教者の福祉における社会参加の課題があることを指摘した。里親養育研究の分野は多岐にわたる。本論文は天理教を事例としたものであるが、天理教が日本の里親に占める割合に鑑み、他教団、非宗教セクターの活動との比較研究に資する知見をも示し、当該各分野の深化・発展に寄与するところが大きいと考えられる。よって本論文は博士(学術)の学位論文として十分価値があるものと認められる。

注意:「論文審査の要旨及び審査員」は、東京科学大学リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。